

アカシア探検隊

「三野先輩よりの奇稿文」

石井君、叙勲おめでとう。

甲…こないだの叙勲は凄いの、アカシアの先輩が三人も上位ランクの叙勲を受けたらたんで、さかねえ。

乙…へー、どんな具合だったんですかねえ。

甲…作家の阿川弘之（29回）先輩が文化勲章。
元文部省事務次官の井内慶次郎（32回）先輩が勲二等旭日重光章。

元スペイン大使の石井亨（35回）先輩が勲二等瑞宝章。
と事務局から聞いとるで。

乙…やったー、今度こそ東京へ取材旅行じゃ。

甲…自費で行くんならええが、アカシア会にやーそよううな金は無いで。

乙…ほんならどうやって記事にするんですか？

甲…色々当たってみたんじやが、石井先輩の同級生の三野浜雄先輩に、お祝いを交えた当時を紹介した文章を頂いたんで、それを載せてもらう事にしたんじや。

乙…今回は久しぶりに榮が出来るのー。

甲…今度るときにきっちり返してもらうで。

甲斐 稔 (63回)
谷口公啓 (73回)

同窓会から「叙勲について一文を…」と依頼があった。私達の仲間から叙勲者が出たのは嬉しく誇らしい一方、私達もそんな年配になつたかと改めて驚いてはいる。さて「一文」については、私よりもっと親しく相応しい者がいるはずと思つたが、五年間机を並べたのだから、親しい部類には入るだろう、と筆を執つた。

昭和十四年四月から昭和十九年三月まで、日中戦争から太平洋戦争という時代に、十三才から十八才の多感な青春期を共にした私達には、特異な共通の体験がある。石井君も共に歩んだその思い出を追えば、これを読む人の大部分を占める後輩諸君に何かを伝えることができれば、それが叙勲への饗にもなるうかと、そんな「一文」にした。

昭和十四年四月、入学式。戦中とはいえ、私達は新調の制服に身を包んで心は奮微色だった。ただ真鍮製の帽章だけは卒業生のお古を磨いたものが支給された。先輩の「志」の継承と、資源小国日本を象徴するものだった。また、「君達は紳士たらんと自分を磨いてほしい。それが出来ないと思う者は、渡した帽章をそこに置いて今直ぐ帰つてくれ。」生徒委員長Gさんの

新入生歓迎の辞が私達の浮ついた小学生気分を一喝した。しかし、この精神は、一先輩の言葉ではなく、その後も一貫した学校の方針でもあった。

入学間もない或る日の昼休み、大きなアカシアの木の下で聴いた「士官候補生」は教養シヨックだったし、同じ昼休みの行事校友歌の練習は、付随する鉄拳制裁の説教と共に通過儀礼の体験だった。「昼食後に校友歌の練習をする。雨天体操場に集まれ」と五年生が触れてくると、途端に食欲がなくなつた。

日と共に時代は厳しさを増して行つたが、一二年生の室積臨海教育、全校生参加の原村野外演習、運動会など学校行事は、五年間何とか平常通り行われ、勤労奉仕や福刈りなどに駆り出されることはあつたが、授業もほぼ正常に受けることができた。

元々とくに進学用の授業はしない学校の方針から、習字・絵画・工作・音楽の授業もキッチリ組まれていた。私たちのクラシックへの興味も二年生で故竹内尚一先生の授業のレコード鑑賞が触発したと思ふ。英語も卒業まであつたし、故瀬野群教先生の国語の時間も楽しかった。

石井君及び私達仲間の青春は時代の移ろいを色濃く映しながらも学内に関する限りは、適当に悩ま

しく適当に楽しい五年間だった。その中にあって、石井君は上位グループにあり、此事超然の風格で悠々と過ごしていた。

しかし、学校の外は戦局が悪化の一途を辿り、昭和十八年夏も近く、新聞の投書欄に「見それと判る表現で予科練志願者のない学校を非難する文章が載るに到つた。それは間違つていると思ひながらもただ歯ざりしていた。」

ところが或る日、同じ投書欄に第七高等学校生徒の実名入りで、反論が載つた。「国に尽くす道は、予科練だけではない。もっと広い見地に立つて考えるべきだ。」と言ふのである。今考えると至極当たり前のことだが、これだけのことを実名入りで新聞に出すことは、当時としては大変勇気があることだった。この生徒が数年先輩のAさんである。まさに附中精神を見た思いだった。

こんな中で私達は進学期を迎えることになつたが、昭和十九年三月の進学については事情が変わつていた。国の科学振興策の一環として、数学・物理・化学の指導要綱が「新傾向」とスタイルを変えて登場していた。

今までの学習をこのスタイルで再整理しておこうと言うのがこの事情で、急遽正月休暇が補修授業に充てられた。数学は大昭完先生、物理・化学は一括して物象となり、最近亡くなられた田辺綱雄先生が

担当された。同時に徹底した進路指導が行われた。

①進学校は自分の郷里もしくは郷里の近くを選ぶ。

②四年終了生以外は、文科志望の者も理科に進む。

③浪人不可、合格確実を第一にする。

全員納得してこの方針に従つた。指導は空襲と兵役を前提にした学校の配慮だった。

石井君は第六高等学校理科に、他に何人かは広島を離れ、残りは広島の上級学校に進学した。

戦後、昭和二十六年頃だったか、東京駅のホームで偶然会い、外交官試験受験のことを聞き「やるな」と成功を祈りながら別れたのを最後に、しばらくは音信が途絶え、名簿その他で、カナダ、ブラジル、パナマと総領事・大使の出世街道を進むのを知のみだった。儀典長になつてからは、国賓クラスの来日の折にテレビで見かけ「元気でやつてるな」と陰ながら応援していた。海外勤務時代には何人か紹介し、任地でお世話になつたこともある。

また六高出身の方との付き合いで、石井君を知っていることで親しみを持つてもらつたことも多い一度会つて、あれこれ纏めてお礼を言い、また久闊を叙りたいと思つている。

叙勲おめでとう。そして一層のご健康を祈ります。

担当された。同時に徹底した進路指導が行われた。

①進学校は自分の郷里もしくは郷里の近くを選ぶ。

②四年終了生以外は、文科志望の者も理科に進む。

③浪人不可、合格確実を第一にする。

全員納得してこの方針に従つた。指導は空襲と兵役を前提にした学校の配慮だった。

石井君は第六高等学校理科に、他に何人かは広島を離れ、残りは広島の上級学校に進学した。

戦後、昭和二十六年頃だったか、東京駅のホームで偶然会い、外交官試験受験のことを聞き「やるな」と成功を祈りながら別れたのを最後に、しばらくは音信が途絶え、名簿その他で、カナダ、ブラジル、パナマと総領事・大使の出世街道を進むのを知のみだった。儀典長になつてからは、国賓クラスの来日の折にテレビで見かけ「元気でやつてるな」と陰ながら応援していた。海外勤務時代には何人か紹介し、任地でお世話になつたこともある。

また六高出身の方との付き合いで、石井君を知っていることで親しみを持つてもらつたことも多い一度会つて、あれこれ纏めてお礼を言い、また久闊を叙りたいと思つている。

叙勲おめでとう。そして一層のご健康を祈ります。

担当された。同時に徹底した進路指導が行われた。

①進学校は自分の郷里もしくは郷里の近くを選ぶ。

②四年終了生以外は、文科志望の者も理科に進む。

③浪人不可、合格確実を第一にする。

全員納得してこの方針に従つた。指導は空襲と兵役を前提にした学校の配慮だった。

石井君は第六高等学校理科に、他に何人かは広島を離れ、残りは広島の上級学校に進学した。

戦後、昭和二十六年頃だったか、東京駅のホームで偶然会い、外交官試験受験のことを聞き「やるな」と成功を祈りながら別れたのを最後に、しばらくは音信が途絶え、名簿その他で、カナダ、ブラジル、パナマと総領事・大使の出世街道を進むのを知のみだった。儀典長になつてからは、国賓クラスの来日の折にテレビで見かけ「元気でやつてるな」と陰ながら応援していた。海外勤務時代には何人か紹介し、任地でお世話になつたこともある。

また六高出身の方との付き合いで、石井君を知っていることで親しみを持つてもらつたことも多い一度会つて、あれこれ纏めてお礼を言い、また久闊を叙りたいと思つている。

叙勲おめでとう。そして一層のご健康を祈ります。

担当された。同時に徹底した進路指導が行われた。

①進学校は自分の郷里もしくは郷里の近くを選ぶ。

②四年終了生以外は、文科志望の者も理科に進む。

③浪人不可、合格確実を第一にする。

全員納得してこの方針に従つた。指導は空襲と兵役を前提にした学校の配慮だった。

石井君は第六高等学校理科に、他に何人かは広島を離れ、残りは広島の上級学校に進学した。